

---

# 異世界？いいえ、ジブリ派です。

刺身ハンター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界？いいえ、ジブリ派です。

### 【Nコード】

N8790Y

### 【作者名】

刺身ハンター

### 【あらすじ】

ある日、隕石がおちてきました。

## 隕石で逝こう(前書き)

異世界・勇者・魔王・転生・チートなどは一切出現しません。

## 隕石で逝こう

……キイイイイインドッカーン!!!

人類にとって、歴史的瞬間が訪れた。突如、フィバルディア王国に落下した謎の物体。どうやら、フィバルディア王国一巨大な山、アルファン山に墜落したようだ。急遽、フィバルディア王国は、調査のために、王立軍隊・カガナの調査団をアルファン山に派遣した。どうやら、謎の物体はアルファン山の、深い崖の谷間に墜落したようだった。調査団の一同は、その物体を発見した時、誰しもが驚きの声をあげた。

その物体は、巨大な鉄？石？綺麗な球体に、表面が鏡面のように光り輝き、大きさが直径三十メートルはあろう巨大大さを誇っていた。

「……これは、何だ？説明できる奴は、いるか？」

誰も、首を縦に振る人間はいなかった。調査団の一人が、剣で謎の物体をつついてみると、あっさりと剣が突き刺さる。どうやら、思った以上に柔らかいようだ…。

「……とりあえず、一部を切り取って、王都に持ち帰りましょう。」

調査団が、王都に謎の物体を持ち帰り、国中の研究者が徹底的に謎の物体を調べあげた。結果、わかった事が一つだけ判明した。この物体は、この世界のどこにも存在しない物質で出来ている。謎の物体は、「メテオ・ライトストーン」と名付けられた。

少年は爆発だ！

「メテオ・ライトストーン落下から15年後。

「いいな？絶対に出力を20以上あげるなよ！ボーイングが限界を越えると、何が起こるかわからないからな！」

「ふん…、20まで上限を上げたのか？この前は、15じゃなかったっけ？」

ボーイング。メテオ・ライトストーンを動力とする、民間用小型飛行機。形状は、まるでサーフボードの左右に、翼をくっつけたような形だ。ボードの先端に、直角に取り付けられた操作ハンドルで操作し、足元に四つのペダルがある。メテオライトストーンの出力設定ペダルに、翼の上下可変ペダル。滞空ホバリングペダルに、緊急脱出用ペダルの四つだ。

ボーイングに颯爽と飛び乗る少年。出力ペダルを1/3程度踏み込み、緩やかにボーイングを浮上させ、ペダルを踏み変え、ホバリングに移行させながら、地上で見守る少年に威勢よく言い放つ。

「これだけ改造すれば、ギガルトなんかには負けねえよ！このボーイング、2500KJもパワーがあるんだろ？」

1KJあたり、約10馬力。

KJ=キルジュ

15年前に落下した、メテオ・ライトストーン。研究に研究を重ねた結果、メテオ・ライトストーンには、未知なる高エネルギーが宿っている事が判明した。その力は、様々な物に効果を発揮する。物

体を浮上させたり、乗り物の燃料として使用すれば、爆発的なパワーを発揮させたりと、まさに未知なる力と可能性を秘めていた。その力を利用して開発されたのが、小型飛行機ボーイング。ボーイングは、ハンドルにしがみつきながら、風を読んで、体重移動をしながらペダルで操る乗り物だ。

「さあ？向こうは新型のボーイングに、細部までキッチリ仕上げているレーシング仕様のボーイングだからな…。普通に考えたら、ま

ず勝てん。」  
「普通は、だろ？大丈夫！お前が仕上げたこのボーイングも、普通じゃないよ。」

「まあ、頑張つてこいよ。ギガルツなんか、ぶつちぎつて来い！」

「おう！任せとけ。」

ボーイングにしがみついている少年は、右腕をあげて、やる気を目一杯表現する。メテオ・ライトストーンは、増える。いや、正確には復元される。切り取ったり、もぎ取ったりしても、5分後には綺麗さっぱり元通りになっているのだ。その為、一部の科学者の見解では、メテオ・ライトストーンは生きてるのでは？生物なのでは？と、いう考えも多数あった。

ギューイイイイイイ！！

少年は、おもいつきり出力ペダルを踏み込む。メテオ・ライトストーン廃出噴射機構から、大量の屑と化したメテオ・ライトストーンが、勢いよく廃出される。

「馬鹿、出力を下げる！」

「おっとっと、ついうっかり」

「頼むよハルシュ…。いくら旧型といっても、120000ガルは、改造費用がかかってるんだからな！」

ガル。この世界で使用されている、金の単位である。  
1ガル＝1円

ハルシュと呼ばれた少年は、ボーイングに乗っている少年の名前だろう。だいたい15歳くらいに見え、短く切って整えた髪の毛に、少しキツめな目つき。身体は細めで、まだ筋肉（体）が完全に出来上がっていない。そのため、外見は少々痩せて見える。15歳という歳を考えれば、当たり前かもしれない。

「へへッ、すげえパワーだな！120000ガルなら、ツケとけよ。レースの賞金で返すからさっ！」

ギューイン！ギューイン！！

「だーかーらー、そんなにフカすなよっつー！」

ハルシュと会話している少年は、自分が天塩にかけて作り上げたボーイングを心配そうに見つめながら、手に持っていたスパナを工具箱の中にしまう。

「ジエンは心配性なんだよ。そんなフカしたくらいで、壊れる代物じゃねーだろコイツは…。」

ハルシュとジエン。二人は、幼なじみで何をする時も一緒につるんで、まるで兄弟のような親しい仲だ。ジエンの家は、ボーイングの小さな整備工場を営んでおり、工場の一角が仲間内のたまり場となっていた。

「まあ、今日は帰るわ。また明日な！」

「おう、またな。」

ギューイイイイイーン！

(……………1…2…3!!)

ドカンッ！！

おもいつきり出力ペダルを踏み抜くと、信じられないような加速で上空に吹っ飛んで行くボーイング。あまりの速度に、風がハルシュと正面からぶつかり合い、目も開けられない。

(うわっ、凄いパワーだ！しがみついているのがやっとで、操作なんか無理！)

出力ペダルを緩め、滞空ペダルをおもいつきり踏むハルシュ。ビタリ！と、空中でボーイングが急停止する。

(……………高度、150ちよつとかな？一瞬でここまで上昇するパワー…、凄いを通り越して、恐ろしいな。)

フィバルディア王国で、一番大きいアルファン山が、ハルシュの目前にそびえ立つように見える。



(…………メテオ・ライトか。あの山に、墜ちてきたんだよな。)

まるで、直ぐ近くに聳えているような錯覚にさえ、陥るような巨大さを誇るアルファン山。中腹の辺りに、ぽっこりと、まるで風景にそぐわない物体が、めり込んでいる。言わずと知れた、メテオ・ライトストーンである。

(メテオ・ライトの不思議パワーはすげえからな……。そのうち、アルファン山をこっそり持ち上げたりして。)

ゴウンゴウンゴウンゴウンゴウン……!!

異様な音と共に、ハルシユの遙か上を、異質な何かが横切っていく。

「うつわ……、フィバルディア王国最大級の大空戦艦・ランカードルツだあ！」

ランカードルツ。フィバルディア王国最大級の、超弩級・空中要塞戦艦。メテオ・ライトストーンの力を応用して作られた、超巨大砲・星屑砲が30門搭載されているフィバルディア王国の最大戦力。全長1000メートル。

「マジすっげ〜。」

まさに、圧巻の一言。赤と青の綺麗なカラーリングが施されており、完成当初は、あまりの大きさに、人々は恐怖感を抱いた。

「ヒューー！俺もいつか、あんな戦艦に乗ってみたいねえ……。さて、帰ろっかな。」

ボーイングの滞空ペダルから足を離し、出力ペダルを僅かに踏むと、ゆっくりとボーイングが風を切りながら進んで行く。

キュイイイイイ……

メテオ・ライトストーンを原動力とする乗り物は、例えようのない、独特な音を奏でる。眼下に広がる風景を眺めながら、ハルシュは帰路につく。

ばぶばぶばぶ……

「げ！？メテオ種の暴れ牛じゃん。追い払うか、振り切るか…。」

メテオ種。メテオ・ライトストーンを誤飲し、体に異常をきたして独自進化した、この世界独特の生き物。

「追い払うような道具も無いし、振り切るか！」

ハルシュに急接近する生物。そいつは、茶褐色の皮膚に、三十センチ程の角が額に生えている、体格の良い牛だ。背中に、四つの細長い透明な翼が生え、翼というよりは、まるでトンボのような羽が正しいだろう。どうやら、ここら一帯は、このメテオ種のなわばりらしい…。凄まじい勢いで羽を動かし、ハルシュに接近する暴れ牛。

「よっしやー！！メエなんか、ぶつちぎってやる！！」

少女は残酷だ！

ざらりとした角が、まるで鋭利な刃物のように見える。あんな角で刺されたら、一たまりもないだろう。ハルシユは、ボーイングの出力ペダルを踏み込み、重心をおもいつきり左側に傾ける。

「ウオリヤアアア！」

左におおきく体を傾け、曲線を描きながら、ボーイングは風を切る。ちらつと後ろを振り返ると、メテオ種は目を充血させながら、恐ろしい形相で羽を動かしながら、ハルシユを追い掛けてくる。舌打ちをして、ハルシユは出力ペダルをさらに踏み込む。

ガギユイイイイイ！！

大量の白煙とともに、廃出噴射機構から、屑と化したメテオ・ライトストーンが排出され、さらにボーイングは速度を上げる。

「ハツハツハアツ！ 上げえよこのボーイング。どこまで加速するだよ！？ これなら、メテオ種でも……」

「ヴもおおおお！」

「……着いてくんなよ！ 何なんだよお前は……！！！」

「……王都・ムルカーン」

「キャハハハハ！マジウケるんですケド〜。」

「ねえ、コイツ袋にしない？」

「サンセー！なんかムカつくしい。」

路地裏で、数人の少女が寄つてたかつて、一人の少女をボコボコに殴る・蹴るの暴行を加えている。殴られている少女は、抵抗もせず、黙ってただただ背中を丸めこみ、事が終わるのをじっと耐えているようにも見える。

「……………う。」

「うつわ、マジキモい！」

「あんななんか死んじゃえば？どうせ親もいないんだしい〜。」

ギューイイイイイイイ…

「…ん？あのボーイング、めっちゃ低く飛んでない？」

「ホントだ。しかも、メテオ種に追いかけてるしい。」

「うっわ!!王都まで来ちゃったよ。このまま、適当な路地に隠れてやり過ごそう。」

ハルシュは、ボーイングの速度を落とし、自分の真後ろにメテオ種をギリギリまで引き付ける。

「……これでもくらえっ!」

今まさに、メテオ種の角が、ハルシュを捉えようとした瞬間、ハルシュはボーイングの出力ペダルを全力で踏み込む。すると、莫大な量の白煙とメテオ・ライトストーンが飛散し、メテオ種にとってはめくらましとなる。ハルシュの白煙攻撃によって、メテオ種は左右に首を振り、苦しそうに怯む。その隙に、ボーイングをおもいつきり地面に傾け、地上に向かって急降下するハルシュ。

「……ねえ、あのボーイング、なんかこっちに来るよ。」

「ちよっ、ちよっと!突っ込んで来るって!」

「シャレになんないしい〜!」

無理矢理路地裏に、ボーイングを強引に着陸させようと試みるハル

シユ。少女達は、そんなハルシユの姿を見て、我先にと、一目散に逃げ出していく。地面と僅かな距離で、ハルシユは滞空ペダルを踏み抜き、見事着地に成功する。メテオ種は、王都の上空をぐるぐると旋回したあと、悔しそうに踵を返して去っていく。

「…………ふいふ、ようやく逃げ切れたぜ。」

心底疲れた様子で、ゆったりとボーイングから降りるハルシユ。すると、路地の片隅に、背中を丸めて何かに怯えているような様子の少女がいる事に気付いた。歳は、自分と同じ15、6歳くらいに見える。

「ん？おい、そこで何してるんだ？気分が悪いのか？」

「……………え？」

その少女は、薄い紫色のセミロングの髪形に、吸い込まれそうなくらいに大きく、綺麗な瞳。整った輪郭に、すらりとした鼻筋。美少女までとはいかないが、かわいらしい雰囲気の子と言った感じだ。ハルシユは、少女の顔や体が、痣だらけなのに気がき、一体どうしたのだろうか？と、思い、少女に聞いてみる事にした。

「…………その傷、どうしたんだい？殴られたような跡があるじゃないか。」

すると、少女は驚いたような表情を浮かべた後に、俯きながら、ポソリと小さな声で、ハルシユの質問に答える。

「…………いつもの事だよ。」

「いつも？なんだそれ？お前はいつも殴られてるのか？つーか、殴られるような事をしたのかよ？」

「…わからない。殴られるような事は、してないつもり。けど、周りの人達は私の事を蔑んで、殴ったり、蹴ったりしてくるの。」

「いじめられてんのか…。」

「…そうかもね。私には、もう何も残ってないから、いじめられるにはうってつけの人間なのかも。」

「やり返せよ！悔しくないのか？いつも理不尽な事で殴られて、なんともないのかよ？感じないのかよ？」

「…やり返したら、あの人達と同じになってしまう。だから、私は耐えるの。傍から見れば、私は一方的にやられているだけかもしれないけど、心…気持ちでは勝っているわ。」

何故か、ハルシユはいらついて仕方がなかった。理由はわからないが、自分の中の考え方が、酷くいびつに歪み、ム力ついて喚きたい衝動にかられた。

「馬鹿じゃねーの？そんなの、ただ逃げてるだけじゃないか。加害者と同じ？そう言っつて、自分の弱い心から目を背けて、現実から逃げてるのを正当化してるだけだろ？やり返す勇氣も、力もないからッ！」

そこまで言っつて、気が付いた。何故、今日初めて会った少女に、こんな事を叫んでいるのか、理解できなかった。ハッと我に返り、少女を見つめると、かなり悲しそうな顔で、ハルシユをじっと見つめ

ていた。

( ヤッペー、泣きそうじゃん…。何か…何か言わないと。 )

「 ……じゃあ、私はどうすればいい訳？貴方に何がわかるの？」

「 ……えーっと、……………変わるんだ。」

「 え？ 」

「 行動するんだよ。まず、周りを変えるなら、自分が行動しないと…。黙って、じっと耐えていたって、状況は変わらない。自分から動かなきゃ、今の状況は絶対に変わりやしねえ。」

そこまで言って、自分はとんでもなく恥ずかしい台詞を平気でぺらぺらと喋って、急に恥ずかしさが込み上げてきた。

「 ……あつ、えーっと、その…。」

「 ……。」

「 ……。」

なんとも言えない、気まずい空気がただよい、ハルシュがどうしようか悩んでいると、少女が口を開く。

「 ……私、急いであるから。」

言って、少女は足早にハルシュの目の前から去っていく。ハルシュは、少女の姿を、いつまでも眺めていた。



( …… 変な奴。 )

## 男は意地を張る

「……翌日、ナルファンデス学園・原動科学教室

「それで、数百キロ離れた王都まで行ってきたのか？」

「しょうがねえだろ？あのボーイングは、戦闘用の装備を取っ払って、極限まで軽量化された、違法改造ギリギリのボーイングなんだから……。」

ナルファンデス学園。ハルシュとジエンが通う、全校生徒3800人の、大規模な学校である。普通・生物・原動の三つのクラスに別れていて、ハルシュとジエンは、原動のクラスに属している。ハルシュは、机の上に足をのっけながら、男のボーイング特集！と書かれた雑誌を顔面に乗せ、けだるそうに、ジエンと昨日の出来事を話していた。

「だいたいよー、なんで対メテオ種用の装備を取っ払ったんだよ？昨日みたいに追い掛け回されたら、不便で仕方ねーよっ！」

「あのなー、レースになったら、そんなモン邪魔だろ？いたずらにボーイングのバランスを崩す、余計な物としか俺には感じないからな。だから取っ払った！」

レースとは、年に一回だけ行われる、ナルファンデス学園伝統の行事だ。いわゆる、文化祭の一大イベント。普通・生物クラスは、出店や劇を行い、楽しむのだが、原動クラスだけは別。二人一組になり、授業で教えられた知識をもとに、ボーイングを研究・改造して、個々が仕上げた最高のボーイングでレースに臨む。レースで上位入賞した者には、名誉の称号・ボルガシアの称号が与えられ、後の進

路に大きく影響してくるのだ。だから、皆が血眼になりながら、レースまでにボーイングを必死に改造する。もちろん、ハルシュとジエンもその中の一人だった。

「だいたい、そんなに対メテオ種用の装備が欲しかったら、コンパクトBCでも背負ってボーイングに乗ればいいんだ。」

コンパクトBC。子供が背負える位の大きさで、民間人が所有を許可された武器。対メテオ種用の武器として用いられる事が多い。

「それこそ邪魔だ！あんなモン背負って、ボーイングなんか操縦できねえよ。」

「じゃあ我慢しな。もうレースまで、日にちが近い。他の奴らは最後の仕上げに入っているし、今更そんな事話しても無駄だぜ。今日の放課後に、最終調整に入ろう。」

「ギガルツの野郎は？あいつには、死んでも負けたくないんですけど。」

ギガルツ。ハルシュとは犬猿の仲の、ライバル的存在。ナルファンデス学園では、剛力のギガルツか、狂犬・ハルシュと呼ばれる程に有名人だ。何をするにも、ハルシュとギガルツは、互いに負けまいと今まで争い合ってきた。例え、勉強でもスポーツでも喧嘩でもなんでも…。今回のレースも、例外ではない。

「ギガルツのボーイングは、もう仕上がってるらしい…。あいつらのボーイングは、新型をさらに改造して、エンジンから翼まで、ほとんどの部品がレーシング仕様に変更されてるみたいだな。」

「まっ、なんとか勝てるだろ！俺の神がかり的な操縦テクニクで、ギガルツなんかぶつちぎりさ。」

「メテオ種も振り切れないのに、新型のボーイングをぶつちぎるなんて無理だろ……。」

「なにーっ、言ったなジエン！覚悟は出来てんだろうな？」

「アハハッ、冗談だって！そんなに怒るなよ。それより……。」

声を小さくして、小声で喋り出すジエン。ハルシュは耳を近付け、ジエンの言葉に耳を傾ける。

「……噂なんだけど、今度のレースにな、王立軍隊・カガナのお偉方が来るらしいぜ。」

「へえ……、なんで？」

王立軍隊・カガナ。フィバルディア王国の治安を維持する軍隊。主に他国の侵略を防いだり、時には進行する組織の事である。また、メテオ・ライトストーンの他国への流出や、闇商人の横流しにニラミを利かせる。敵国との戦闘時には、ランカードルツや、戦闘用ボーイングで闘う。

「優秀なボーイングの整備士と、乗り手が欲しいんだって。」

「なるほどね。ぶつちやけた話、カガナがスカウトに来るってか？兵士も人手不足なんかね……。」

「かもな。」

――王都・ムルカーン

「逃げてるだけだろ。やり返す勇気も、力もないからっ！」

昨日ハルシュに言われた言葉が、雷鳴のように鳴り響き、頭から片時も離れない。

(……………なんで、あの人の言葉が、……………頭から、離れないの?)

何かに導かれるように、フラフラと王都をさ迷い歩く少女。目は虚ろで、明らかに雰囲気がおかしい。

(……………本当は、わかってる。自分で、……………気付かないようにしていた、……………知りたくなかった部分を、……………ごまかして、隠していた。それを、……………あの人が、開いたんだ。)

「おっ? いたいた」

「今日も遊ぼうかあ。」

「こっち来いよ。」

突然、後ろから髪を掴まれ、三人組の少女達に、路地裏へ連行される。別に、今に始まった事じゃない。半年前から繰り返し行われて

いるリンチに、次第に馴れていった少女。少女の名前はミレナ。一年前に事故で両親と住む家を失い、親戚もない為、一人で細々と王都の路地裏にひっそりと暮らしている。そんなミレナに目を付けたのが、彼女達だ。親も住む場所もない、こじき同然のミレナに、自分達のストレスを解消する為ほぼ毎日ミレナを見つけては、殴る蹴るの暴行を加える。暴力で済むなら、まだマシな方だ。知らない中年の男から金を貰い、ミレナを男に売った時もあった。まさに、人間として最低な部類に属す三人組。

(……自分が変わらないと。)

「……いや。」

「は？なんか言ったかクズッ！」

「離して！」

「なんだとこの野郎〜！」

「フルボッコ決定〜」

「マジ死ねよ。」

少女の放った拳が、ミレナの頬にめり込み、あまりの痛さに頬を押さえながら、倒れ込んでしまうミレナ。すかさず、ミレナの腹部をおもいつきり踏み抜き、三人でひたすらミレナの体を蹴り飛ばす。だが、ミレナの視線は、まるで死んではない。今までとは違う、逃げの弱気な姿勢ではなく、鋭く相手を睨みつけるような、強い視線で三人組を見ている。

「……コイツ、マジム力つくしい。」

「殺す？」

「…いや、いい事思いついた。」

そう言つて、三人組に引きずられるように連れていかれるミレナ。四人の視線の先には、アルファン山がうつつていた。

## 女も意地を張る

ギューイイイイイ！

「…どうだい？昨日より、遙かに乗りやすいだろ？」

ジエンが油まみれになりながら、自慢げにハルシュに問い掛ける。

「ああ、最高だね。」

出力ペダルを踏み込み、ボーイングの調子を慎重に確かめながら、ジエンに返事を返すハルシュ。昨日より、明らかに出力がパワーアップしている。出力ペダルを踏んだ瞬間に、はつきりとわかる程の違いに、ハルシュの体は震え上がり、気分が高揚しているのが、自分でもわかった。

「なんだ？恐いのかハルシュ！？震えてるじゃないか。」

「……馬鹿野郎、恐い訳あるかい！こんなモンスター級のボーイングに仕上げやがって。武者震いだぜ！」

ボーイングの変貌ぶりに、ハルシュが驚いていると、空中で爆音が響き渡る。どうやら、誰かがボーイングの試運転をしているようだ。爆音につられて上空に視線を向けると、鮮やかにボーイングを乗りこなす、ギガルツの姿がハルシュの目にうつった。

ゴギューイイイイイ！

ハルシュの視線に気付いたギガルツは、ボーイングの速度を落とし、



ゆっくりと滞空状態に移行する。そして、ボーイングをハルシユの目前に着地させ、一言。

「何見てんだよ？」

ギガルツは長身で、色黒の肌をしている。筋肉モリモリ逆三角の体格に、坊主頭で眉は全て剃り落とし、かなりの恐持てだ。ハルシユは、ギガルツにガンを飛ばしながら、ドスの利いた声で、負けじと言り返す。

「あゝ？別にテメエなんか見ちゃいねえよ。自意識過剰も大概にしやがれ！」

「んだと？言うじゃねゝか、負け犬ハルシユが！」

「は？俺がいつテメエに負けたんだよ？なんなら今ここで、勝負するか？」

クツクと薄ら笑いを浮かべて、ハルシユを挑発するような態度で話始めるギガルツ。

「弱い犬ほどよく吠えるな。まさしく、この言葉はお前にピッタリだな。」

「こつ、この野郎！カンベンならねえ！！」

ハルシユがギガルツに飛び掛かるうとした瞬間、ジエンがハルシユの背後から押さえにかかり、なんとかハルシユを止められた。

「離せジエン、離せよこの野郎！！」

「馬鹿野郎、今問題を起こしたら、レースに出られなくなるぞ?」

「それは向こうも同じだっ!男はナメられたら終わりだ。意地張ってナンボの生き物だ!ナメられて黙って引く奴は、男じゃねえ!ナメられたまま引き下がったら、男としての価値なんか無くなるんだよッ!」

「ふっ、くっせゝ事をぺらぺらと…。確かに今問題を起こすのは困る。……じゃあ、コイツでケリ付けようや。」

そう言つて、ギガルツが指を差した物は、ボーイングだった。

「ここからスタートして、アルファン山をぐるっと周り、再び戻ってくる。先に戻つて来た方が勝者だ。」

「上等だコラアツ!今直ぐヤツてやるよ。テメエなんかぶっちぎつてやる!」

颯爽とボーイングに乗り込む二人。ボーイングを起動させ、二人同時に滞空ペダルを踏み込む。

「ジエン、スターターやつてくれよ。」

「おい、マジで勝負すんのかよ!?しかも、アルファン山まで行つて、往復だと?そんな超長距離なんか飛んだら、ボーイングがイカレちまう!パワーだけ底上げて、ボディの仕上げはまだなんだぞ!?!」

「なんとかなる。いいから合図してくれ!」

「知らねえぜもっ！」

ジエンは、観念した様子で、二人の前に出る。

「行くぞー！」

… 3 … 2 … 1 … GO!!」

ジエンが腕を振った瞬間、二人はおもいつきり出力ペダルを踏み抜く。大量の白煙と、屑と化したメテオ・ライトストーンがばらまかれ、爆音をあげながら、二機のボーイングは凄まじい速度で上昇していく。

「先行はギガルツか…。ハルシュのボーイングは、いかにボディが耐えられるかが勝負の鍵だ…。って、あああああ!!」

そこまで言って、とても大切な事に気付いたジエン。

「む、無理だ…。ハルシュは100%負ける！あのボーイングには、もうメテオ・ライトの残量がほとんどない…。アルファン山まで持つかどうか…。」

ギユイイイイイイ！！  
ガギユイイイイイ！！

「クツソ、速い！」

遙か前を、まるで狂ったようにかつ飛ぶギガルツのボーイング。辛うじて着いていけるが、少しでもミスをすれば、あつという間に置いていかれるだろう。それくらい、ギリギリの領域まで、ハルシュは攻め込んでいた。出力ペダルをべた踏みして、危険を承知でギガルツに食いつくハルシュ。だが、ハルシュはうつすらと感じていた。向こうの……ギガルツのボーイングは、まだまだ余力を残している。流石、新型のボーイングに改造を施しただけあって、ハルシュのボーイングとは、次元が違う速さだ。内心、舌を巻いて、何とか追い付けないものかと考えていた矢先、突然ハルシュのボーイングが急激に速度を落とす。

「なっ、なんだ!？」

……ぶすっ、ぶすん。

異様な音と共に、出力が全く出なくなり、どんどん高度が下がっていくボーイングに、焦りを感じるハルシュ。

きゆううう………

「エネルギー切れ!？」

## 父親は大変だ

まるで、枯れ葉がゆっくりと舞い散るように、錐揉み状態になりながら、ハルシユのボーイングは落下していく。緊急脱出ペダルを踏めば、ハルシユは助かるだろう。だが、ハルシユはペダルを踏まない。このボーイングは、自分とジエンが互いに協力しながら作り上げた、大切なボーイング。緊急脱出ペダルを踏めば、ハルシユは助かるが、ボーイングは百パーセント大破する。壊してたまるか。そんな強い思いが、ハルシユの体を支配して、意地でもボーイングから脱出しようとしめない。

「馬鹿野郎、何やってんだハルシユ!!! 早く脱出ペダルを踏め!」

急に後ろから、ハルシユのボーイングの機動音が聞こえなくなったため、ギガルツは不審に思って背後を振り返ると、ハルシユのボーイングが真つ逆さまに墜落している光景を目にしたギガルツ。慌ててボーイングを傾けて旋回させ、ハルシユの後を追う。

「嫌だ!冗談じゃねえ。」

「アホ……死ぬぞ!!! 命が惜しくないのか!?!」

「このボーイングは、命より大切なんだ!だから、絶対に壊したくないっ!!!」

「死んだらなんにもならねえだろ!つまんねえ意地張ってないで、早く脱出しろ!」

「命を賭けて守りたいモノってあるだろ?人によっては、それが女

だったり金だったり……。俺の場合は、このボーイングなんだよっ！」

長い付き合いだからわかるが、こういう時のハルシュはガンコで、テコでも動かない事をギガルツは知っていた。だから、ギガルツは焦る。このままでは、ハルシュはボーイングもろとも地面にたたき付けられ即死する。現状を打破する考えも浮かばず、最悪な事態を想定すると、ギガルツは嫌な汗が止まらなかった。

「……………あつ、アンカーだ。ハルシュ、お前のボーイングに、アンカーを打ち込むぞ！ 衝撃に備える！！」

「アンカー？ そんなモン、なんの役に……。」

「いいから、俺を信じろ！」

アンカー。ボーイングを停止させた時に、動かないように地面に打ち込む射出式の小型杭。切っ先はとても鋭利で、杭とワイヤーがセツトになって射出される。

ギガルツは、ハルシュのボーイングに狙いを定め、勢いよくアンカーを放つ！ アンカーは一直線に飛んで行き、左翼に見事命中する。そのまま機体の向きを180度反転させ、おもいきり出力ペダルを踏み付けると、ワイヤーがピンツ！ と張ったと同時に、とてつもない衝撃がハルシュを襲い、危うくボーイングから投げ出されそうになってしまう。ハルシュのボーイングは、ギガルツが引き上げるような格好になる。だが、ギガルツのボーイングは、いくら新型といっても、ボーイング二機分の推力は無く、徐々に高度が下がっていつてしまう。

「クツ、駄目だ……。ハルシュ、アルファン山までこのまま行くぞ！」

「ああ！？俺、教室に鞆を置いてきちゃった…。ガルなんか持ってねえよ！」

アルファン山は、メテオ・ライトが墜落した山。麓町には、破格値でメテオ・ライトストーンが取引されている。その為、ギガルツはアルファン山までボーイングを引っ張り、エネルギー補給をしようと考えた訳だ。

「ガルなら貸してやる。後で返せよ！」

↓アルファン山麓町・デガルワイス↓

露店が道いっぱいに広がり、観光客が賑やかに右往左往して、活気に包まれている。フィバルディア王国一の観光地、それが、デガルワイス。山の麓町という土地なので、緑と人の手が見事に調和し、観光地特有の賑わいと、どこか落ち着く不思議な雰囲気、このデガルワイスにはあった。

「オラ、速く歩けよ！」

「マジトロイしい。」

「キモキモキモキモ！」

ミレナは、三人組の少女達に、王都から強制的にデガルワイスまで引きずられるように連れて来られた。

「あつ、メテオ・ライトの小サイズ一個ちょうだい。」

三人組の一人が、露店からメテオ・ライトストーンを購入する。そして、そのまま人気のない、山の方向へミレナを連れていき、一言。

「食べ。」

理解不能。ミレナの前に、メテオ・ライトストーンを突き出し、食べと命令するそいつらに、困惑と不安、そして、軽い嫌悪を込めた視線を送る。未知の力を有している、メテオ・ライトストーン。それが、フィバルディア王国に墜落して、15年の月日が流れた。長い間、様々な研究が重ねられ、確実に判明している事がいくつかある。まず一つは、高エネルギーを備え、どんな乗り物にも対応する、夢のような力。次に、メテオ・ライトストーンを飲み込んだ生き物は、異業な姿に変貌するか、絶命するかのどちらか。メテオ種はその原理で生まれた、新種の生物と言える。そして、人間がメテオ・ライトストーンを飲み込んだ場合、100%発狂して死ぬ。今まで数多くの人間が、人類の進化と発展の為にメテオ・ライトストーンを飲んだ。だが、その結果は、必ずメテオ・ライトストーンを飲めば死ぬ。と、いう悲惨な運命が待ち受けていた。それを、彼女達は知らないんだッ！と、心の中で叫ぶミレナ。だが、次に発せられた言葉に、ミレナは心底恐怖した。

「ホラ、はよ食って死ね。」

「アハハハハハ！マジウケるんですケド〜。」

明確な殺意が自分に向けられている…。何故、自分がこんな目に合わなければいけないのか？

親がないから？



家がないから？

友達がいらないから？

ガルがないから？

人と異なる生活だから？

いじめ、差別や偏見。それらが行われるのは、人間としての本能。理屈じゃなく、本能なのだ。他人を見下して優越感に浸る。みすばらしい人間を見て、自分はまだマシだと安堵する。何となくムカつくから、隣の席の人間をいじめる。これらの行為は全て、他人より上の立場に、自分はコイツより優れているという安心感や、ストレスのはけ口を作る為の、人間の醜い本能だ。負の連鎖のピラミッド。立場の強い人間は、自分より弱い人間を虐げ、虐げられた人間はさらに自分より弱い人間を虐げる。これの繰り返し。そして、ピラミッドの底辺の人間、虐げる相手がいない人間は、追い詰められおかしくなる。

「嫌だ、食べない！死にたくない！」

ミレナは、精一杯抵抗する。今まで心の奥底に閉じ込めてきた、怒りと憎しみ。そして、悔しさと悲しみが混ざり合った負の感情が溢れ出し、叫び、喚きながら暴れる。

「は？超うぜー。」

「マジ殺すしい。」

力づくで張り倒され、二人がかりで押さえ付け、何もできなくなる

ミレナ。その表情は、悔しさで満ちていた。

## 母親も大変だ

ミレナは、口を貝のように閉じる。生きる為に：気違いじみた狂気から、逃れる為に口を閉ざす。そんなミレナの抵抗は、あっさりと撃ち破られてしまう。鼻をおもいつきりつままれ、呼吸が苦しくなる。プハアツ！と、空気を吸いこむ瞬間、メテオ・ライトストーンを口に突っ込まれ、吐き出そうとするが、無理矢理奥まで押し込まれて、ついに、ミレナは飲んでしまった。

「キヤハハハハ！じゃあね〜。」

「マジ死ねだし〜。」

「超ウケるんですケド〜。」

（死ぬ…死ぬ？嫌だ！なんで私が死ななきゃならないの？私が何かしたの？本当に死ななきゃならないのは、あいつらの方じゃないの？許さない……死ぬ…殺してやる！！）

三人組は、ミレナを嘲笑いながらこの場を立ち去る。ミレナは、三人組の後ろ姿を見据え、涙を流す。ただの涙ではない、血の涙だ。悔しさ、憎しみ、怨み。それらの負の感情が、まるで竜巻のように、身体を轟々と駆け巡る。

「…………ツ、あああああああああ！！！！」

叫ぶ。感情に身を任せ、力いっぱい叫ぶ！まさしく、それは、魂の叫びと言えよう。死に逝く者の、憎悪の叫びだ。

「ハハツ、マジで狂うんだ。ウケる〜。」



たり込んだ。この異様な生物は、ミレナだ。間違いない。声も仕種もそっくりだし、背丈もピッタリ合っている。何故、こんな姿にと、感じた瞬間、すぐに疑問は解けた。そう、メテオ・ライトストーンである。本来なら、人間が飲み込めば、発狂して死ぬはずだった。だが、何らかの異常がミレナの体に起こり、死なずに済み、メテオ種へと変貌したのだ。人間のメテオ種。これは、新種の生物・人類が進化した姿なのかもしれない。

力が、身体の奥底から憎しみと共に溢れ出す。ミレナは、力を手に入れた。もう、二度といじめられないような、強大で恐ろしい力を手に入れたのだ。人間には、身にあまる力を手に入れた時、いくつかの行動をとる。一つは、この力を世の為人の為に役立てようとす  
る人間。二つめは、強大な力を…自分を恐れて力を使用せず、今まで通り暮らす人間。そして、三つめは、今まで自分の事を虐げてきた人間に復讐するためや、嫌いな奴に力を使う人間。四つめ、私利私欲…自分の為に使う人間。だいたいはこの四パターンだろう。ミレナは、三つめのパターンの人間だ。

「……あなた、許さないから。死んで償いなさい！」

くアルファン山麓町・デガルワイス上空く

「……アン？なあ、ハルシュ？今、森の辺りから叫び声が聞こえてこなかったか？」

「……ん？俺には聞こえなかったけど？」

ハルシュとギガルツは、ボーイングの高度をギリギリに下げながら、麓町・デガルワイスを目指していた。高度をギリギリに下げ理由には、万が一アンカーが切れたり、強風でボーイングが煽られたりしても、高度を下げておけば、人間とボーイングのダメージは最小限で済む訳だ。

「……………ほら！微かだけど、また聞こえた。女の叫び声だ！」

「ああ？俺には聞こえねえよ。」

ギガルツは、右手を右耳に当てて、耳をすます。

「……………あつちだ！行くぞハルシュ！！！」

「はあ？んなモンほっとけよ！俺のボーイングに、メテオ・ライトを補給する方が先だろ。」

「馬鹿！あの叫び声は、尋常じゃない。この世の終わりみたいな叫び方だぜ？」

ギガルツが言い終わると同時に、突然二人の前方の木々が、数本薙ぎ倒され、さらに土煙りがもくもくと炊き込める。驚いて言葉を失い、ただ前方を阿保のように眺めていると、一本の木がド派手な音と共に上空に吹き飛び、二人のいる高さより上昇して、明後日の方向に吹っ飛んで行く。

「……………は？なんだよ…これ。」

「凶暴なメテオ種じゃね？象とかサイがベースの奴なら、これくらい余裕だろ？」

「……この辺りに、そんな生き物いたか？」

「……いないだろうな。これ、麓町まで降りて、カガナに連絡した方がいいんじゃないか？軍隊なら、アレくらい止められるだろ。」

「……そうだな。ハルシュのくせに、たまにはいい事言うじゃない……」

そこまで、ギガルツの言葉ハルシュは聞いた。瞬間、アンカーのワイヤーが何か、物凄い力によって擦切られ、ハルシュとボーイングは地面に向かって真っ逆さまに墜落していく。何かとハルシュはギガルツを見据えた。刹那、ギガルツのボーイングに何か、得体の知れない化け物が接近して、化け物はギガルツの体もろともボーイングを真っ二つに切り裂く。ハルシュの視界には、ただの肉塊と化したギガルツが、ボーイングの爆発に巻き込まれ、木っ端みじんに吹き飛ばす光景が映っていた。

「ギガルツ……！！」

叫んで、落下。おもいつきり地面に体を打ち付け、呼吸ができない。体も全身が麻痺したように、全く動かせない。わけのわからぬ呼吸音が勝手に喉から鳴り響き、目に涙を貯めながらはいずれのように苦しむハルシュ。すると、何者かがハルシュに近付いてくる。かろうじて首だけ動かし、そいつを視認しようと、ハルシュは体を必死に振り、視界に捕らえようとす。

「……………カツハ、ウツ…、お、お前は…、確か王都で…。」

ハルシュが見た物は、異業の生物へと姿を変貌させた、ミレナの姿

だ  
っ  
た。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8790y/>

---

異世界？いいえ、ジブリ派です。

2012年1月13日23時50分発行